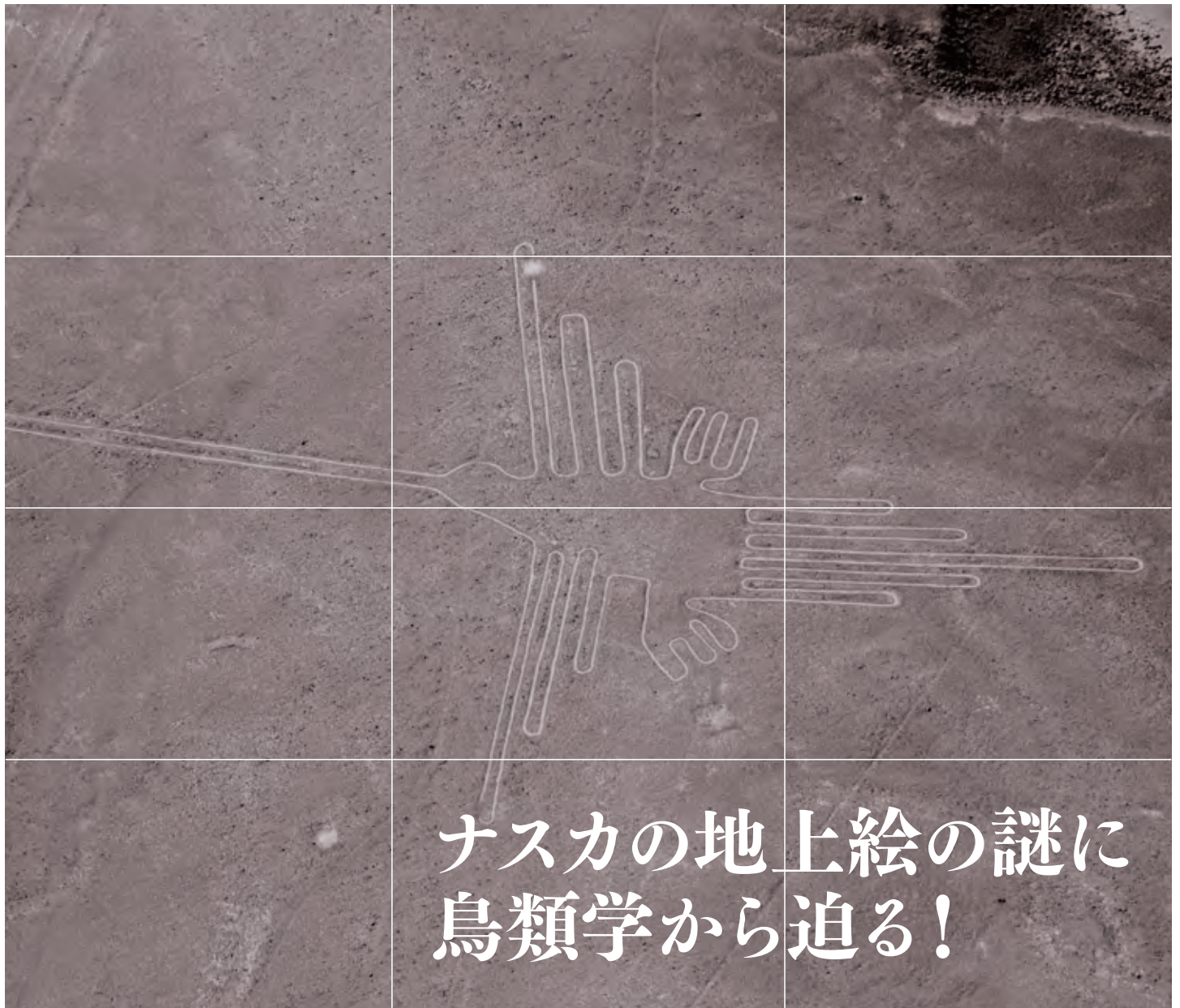




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	山本, 順司; 井上, 猛
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 39
Issue Date	2019-09-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82857
Type	book
File Information	MuseumNews_39_web.pdf





ナスカの地上絵の謎に 鳥類学から迫る！

CONTENTS

01	新館長挨拶
03	退任教員の挨拶
04	新任教員の紹介
06	夏季企画展示 「K39: 考古学からみた 北大キャンパスの5,000年」
08	常設展示〈収蔵標本の世界〉「医学標本の世界」
10	卒論ポスター発表会

新館長挨拶



本年4月に中川光弘前館長の後任として、第8代北海道大学総合博物館長職を拝命しました。所属は工学研究院、専門は建築デザインです。就任にあたり、自己紹介とご挨拶をさせていただきます。

生まれは、兵庫県芦屋市です。幼少時に、外科医であった父親の研修でドイツのデュッセルドルフに2年暮らしました。帰国後は、兵庫県宝塚市に住み、神戸市にあるイエズス会系の中学高校に通い、キリスト教の考えに触れました。高校生の時に建築の道を志し、東京工業大学に進学しました。東工大では、国内外に知られるプロフェッサー・アーキテクトのもとで、建築設計の理念について考え、いかに論理的に設計コンセプトを組み立て、建築を実際のかたちにするかについて学びました。工学ながら、かなり文系的な側面が強い専門分野と言えます。同大修士課程では、チューリッヒ工科大学で1年間学ぶ機会も得ました。その後、大手建設会社大林組設計本部で、意匠設計実務に没頭した6年余を経て、今度はオランダに渡りました。チューリッヒ留学中に公開講義を聴き、強い感銘を受けたオランダ人建築家ヘルマン・ヘルツベルハーが、アムステルダムに創設したベルラーヘ建築研究所の門を叩くためです。オランダでは、1990年代の好景気に湧

く中、幸運にもヘルツベルハー建築設計事務所で、足掛け5年に渡る設計実務に主体的に携わる機会も得ました。30代半ばに独立と帰国を決心、神戸と個人的なご縁のあった宮崎を拠点に建築設計事務所を開設し再出発しました。その後、2005年に再び大きな転機が訪れました。北海道大学で、建築設計実務をベースにした建築デザインの教育・研究に携わる機会を得て現在に至っています。

日本では、私の学位と研究領域は工学分野となっていますが、建築デザインの本質は、理系・文系を問わず様々な領域を跨ぐ知見や技術を広範に理解・駆使し、デザインに関わる多くの方々と意思疎通を図りながら、総合的な見地からひとつのかたちに纏め上げることにあります。総合博物館での業務や研究と、私がこれまで携わってきた実務や研究との間には、かねてから親和性があると考えていました。今回、微力ながら総合博物館のお役にたてるのであればとの思いから、館長職を拝命させて頂く決心をしました。

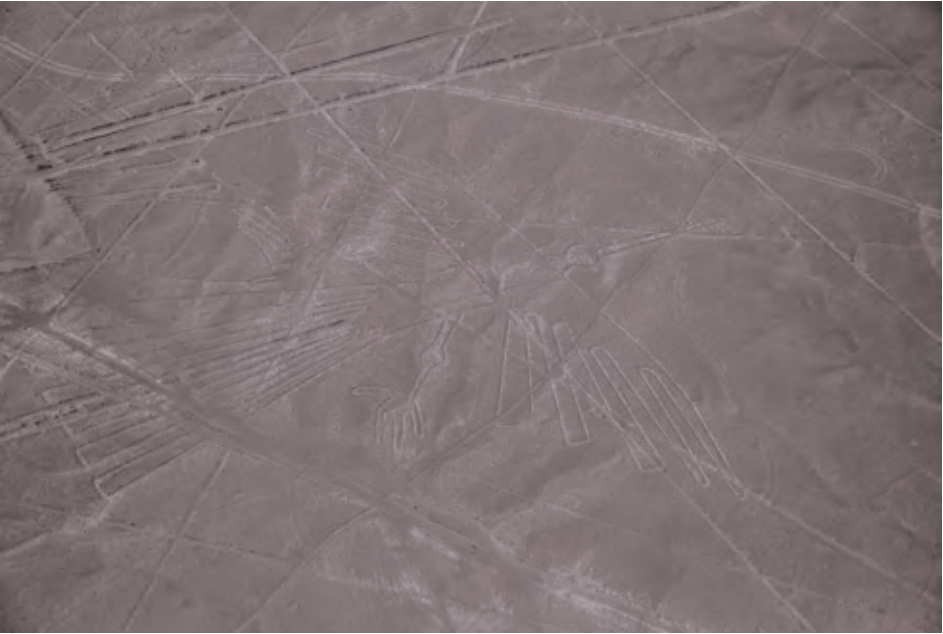
本学では、総長室構成員として、2012年度から学内歴史的資産の調査、保存活用に関する企画・立案に本格的に携わってきました。総合博物館の耐震改修やバリアフリー化にも関

わらせて頂く機会があり、スタッフの皆さんが総合博物館に寄せる想いと熱意に強い感銘を受けたことも、私のモチベーションとなっています。

私は博物館学には全くの素人ですが、この度の館長職拝命にあたり、全学運営における総合博物館の役割と位置づけを再整理し、ハード・ソフト両面のバランスが取れた運営を実現することが、与えられた使命ではないかと考えています。本総合博物館の運営は、専任・兼任教職員の他、60名程の資料部研究員、300名程のボランティアスタッフらに支えられ、2018年度には、入場者数が年間22万人を超えるに至りました。このような人の繋がりや熱意は、他の大学博物館には見られない強みです。1999年4月に開館した本総合博物館は、今年で創設20周年を迎えます。また、本総合博物館がある旧理学部本館は、1929年11月に竣工した歴史的建造物で築90年を迎えます。この節目の年にあたって、皆さんと力を合わせ、行政・民間・地域と幅広い連携を図り、永く広く親しまれる北海道大学の顔をつくっていききたいと思いをします。

小澤 丈夫
(総合博物館長・工学研究院教授／建築デザイン学)

ナスカの地上絵の謎に鳥類学から迫る！



「コンドル」の地上絵 長すぎる嘴と尾羽からコンドルとはみなしがたい。

ナスカの地上絵は、ペルー南部の海岸から内陸に約50kmの砂漠台地に描かれた巨大な図像群です。製作の技法や周囲に落ちている土器などの遺物から、パラカス期後期(約2,400年前～)からミドルホライズン(～10世紀)あるいはイカ期(～16世紀)に作られたと考えられています。直線、幾何学図形、動植物の図像が2,000点以上確認されており、『ナスカとパルパの地上絵』としてユネスコの世界遺産(文化遺産)に登録されています。

ナスカの地上絵は世界的に有名です。しかし、何の目的で描かれたのか、またそのモチーフは何かなどはよくわかっていません。その最大の理由は、ナスカ期(約2,200～1,300年前)やパラカス期などを含むブレ・インカ期の

文化には文字がなかったためです。地上絵の制作目的については、農耕儀礼に関わるものであったという説や、天文暦であったとする説、さらには宇宙人との交信に関わるものであったとする説まであります。

世界遺産保護のためにペルー文化庁がユネスコに提出した報告書によれば、ナスカ台地に描かれた動植物の地上絵でもっとも多いのは鳥類で、16点が知られています。これらの地上絵は主にパラカス期後期からナスカ期に制作されたものと考えられています。鳥類の地上絵は、これまで図像の全体的な印象や、ごく少数の形態的な特徴を根拠に「コンドル」や「ハチドリ」、「フラミンゴ」などと同定されてきました。しかし、同様な特徴が他のグループの鳥に



洋上を飛翔するペルーペリカン

認められないか、また同定の根拠とした以外の特徴が同定されたグループの鳥と一致しているかはほとんど検討されてきませんでした。そこで、私たちは各図像の形態的特徴を可能な限り抽出し、現在ペルーに生息する鳥の形態的特徴と比較する再検討を試みました。

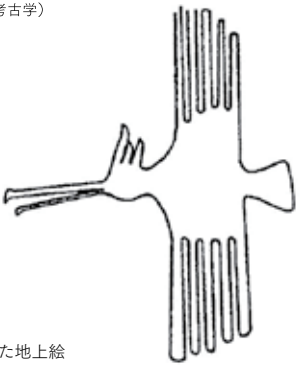
形態的特徴から同定できた地上絵は16点中3点で、カギハシハチドリ類1点とペリカン類2点が確認されました。カギハシハチドリ類と同定した図像は、これまで「ハチドリ」と呼ばれてきた図像です。ペルーに生息するハチドリ科の鳥で尾羽の中央部が突出するのはカギハシハチドリ亜科の鳥にしかいません。一方、ペリカン類と同定できた図像の特徴は、冠羽があることや長く先端が鉤状をした嘴があることなどです。ペリカン類と同定した図像はこれまで「グアノ鳥」や単に「鳥類」と呼ばれてきたものでした。一方、「コンドル」や「フラミンゴ」と呼ばれる著名な地上絵は、ともにコンドル類やフラミンゴ類とは一致しない形態的特徴があり、これらの鳥とはみなせないことが明らかになりました。

ペリカン類はナスカ台地から約50km離れた海岸部に、カギハシハチドリ類はアンデス山脈の東側あるいは北側のアマゾニア地域に生息します。ナスカ台地周辺に生息するアンデスコンドルやキバシヒメバト、フタオハチドリなどの鳥ではなく、これらの外来の鳥が描かれた背景には、地上絵が描かれた目的が密接にかかわっていると考えられます。

掲載雑誌：
Journal of Archaeological Science: Reports
26: 101875, 2019. doi.org/10.1016/j.jasrep.2019.101875

江田 真毅
(研究部准教授／動物考古学)

今回の研究で
ペリカン類と同定された地上絵



退任の挨拶

●中川光弘
（資料部研究員／理学研究院教授）

2019年3月をもって総合博物館館長を退任することになりました。4年間の任期でしたが、北大総合博物館にとって大きな節目の時期に館長であったことに、感慨を覚えています。

2015年4月に、津曲前館長から引き継いだ際には、博物館は耐震改修のために全面休館となったときでした。そしてそこから1年余りの期間で、博物館スタッフ、資料部研究員そしてボランティアの皆さんが丸となって、リニューアルオープンに向けて取り組むことになりました。私も慣れぬことばかりではありましたが、皆さんが動きやすい環境づくり、あるいは大学当局とのやりとりに専念しました。そして2016年7月にリニューアルオープンを迎えることができました。このリニューアルオープンでは、広報拠点としての博物館として「北大の魅力、全部魅せます」、また地域の拠点として博物館として「よ

り市民に愛される博物館へ」というキャッチフレーズのもとに、展示構成や施設が一新されたのは皆さんもご存知のとおりです。その効果はリニューアルオープン後の総合博物館の入館者の伸びに現れており、2018年度には20万人を超えました。限られた予算・人員と時間の中で、リニューアルオープンを成し遂げた博物館スタッフと関係者の皆さんを本当に誇りに思います。その他、任期中には北大内の図書館、植物園や文書館などと連携するキャンパスミュージアム構想、それに関連した収蔵庫構築、そして耐震基準を満たさないために閉鎖している水産科学館本館の再開計画などに取り組みました。いずれも実現はしていませんが、概算要求などで大学当局に働きかけ続けたことで、近いうちに何とか実現するのではないかと考えています。

今年は総合博物館創設から20年を迎えますが、これまでの博物館スタッフと関係者の努力によって、総合博物館は学内外で認知され、北海道大学の顔としての存在となってい

ます。私は館長就任の挨拶で、大学法人化以降の大学の置かれた環境の激変の中で、大学の個性が本当に試される時代となってきたと述べました。その状況は、この4年間で変わる事ことはなくさらに厳しくなってきたと思いますが、その中で総合博物館の果たすべき役割が、ますます大きくなってきたと思います。これからの博物館の皆様の一層の奮闘を期待するとともに、私も博物館OBとして応援してゆく所存です。最後になりますが、4年間にわたり私を支えていただいた皆様に感謝致します。ありがとうございました。



退職の挨拶

●高橋英樹
（資料部研究員／名誉教授）



農学部付属植物園で18年、総合博物館で20年勤務した。北大での38年の在職期間は、すべて学部以外の「周辺部」で過ごしたことになる。私が北大植物園の助手に採用されたのは1981年5月で博士号を取ってすぐの満27才だった。当時の大学付属施設の助手は施設生え抜き技術職員の最終職階だったので、大学院上がりの「若造」が来たという事で驚かれた。付属植物園時代には、米国国立樹木園やイギリスキュー植物園、フィンランド大学植物園等による北海道での種子採集調査のサポート役をして刺激を受けた。また1989年には7か月間、スウェーデンで研究生生活をさせてもらっ

た。植物園技官の人たちと道内の種子採集調査をしたのも忘れ難いし、カナダの高山植物を導入して新ロックガーデンを築造できたのも技官の人たちのおかげだった。

そして1999年に設置が認可された総合博物館に異動した。というよりは、農学部植物標本庫の現状を憂い、私がやらずして誰が北大植物標本庫を維持・発展させられるのかと自ら手を挙げたのだった。

新たに学内各部局から集まってきた(学部で余されて追い出されてきた?)理学部の松枝、箕浦、阿部、文学部の天野、水産学部の今村そして農学部の私で、大学博物館とはいかに

あるべきかを喧々諤々議論したのも懐かしい。殴り沙汰になる寸前までいったこともあった。

付属植物園・総合博物館時代の夏期野外植物調査は、東シベリア(1992～1994)、千島列島(1995～1997, 2000)、サハリン(2001～2003)、そして北方四島ビザなし交流(2009～2010, 2012)など、多数経験させてもらった。このように長期野外調査に出ることが許されたのも、学部ではない「周辺部」の事実上1人1研究室でいられたおかげだろう。

総合博物館での新しい活動は、植物標本庫の充実と展示活動だった。主な企画展示として『北大樺太研究の系譜』(2006)、『北大千島研究の系譜』(2007)、『マキシモヴィッチ・長之助・宮部』(2010)、『クラーク博士と札幌の植物』(2012)、『ランの王国』(2016)などの開催に関わり、コマロフ植物学研究所、マサチューセツ大学、ハーバード大学などと協力できたのも思い出深い。これも研究支援推進員の皆さんのサポートのおかげだった。

総合博物館はキャンパスを訪れる多くの市民・観光客のお立ち寄りスポットの一つとなった。良し悪しは別として、日本の大学博物館の中では最もユニークな存在の一つになった。益々の発展を祈念し、これまでのご厚情に感謝します。

新任教員紹介

●首藤光太郎
（研究部助教／植物分類学）



植物担当として、4月に着任しました。植物分類・系統学が主な専門で、学生・ポスドク時代は光合成能を持たず菌へ寄生しながら生育する植物の進化や、水生植物の調査手法を題材とした研究を行ってきました。総合博物館には、標本調査のため着任前に過去2回来たことがあります。標本庫のゲストブックにある過去の自分が書いた名前と所属を見ると、当時

の自分を思い出して不思議な感覚に陥ります。初めて足を踏み入れたのは修士1年のときの2012年7月で、当時の僕はツツジ科イチヤクソウ属の研究をはじめたばかりでした。イチヤクソウ属は、北海道に多様な種が見られるだけでなく、前任である高橋英樹先生が専門としていた植物でもあります。このため、標本庫のコレクションは、真っ先に調査の対象となる重要なものでした。こうして総合博物館に着任でき、これらの標本と過ごしていけることは、大変な幸運に恵まれました。

総合博物館における主な業務の一つに、陸上植物標本庫(SAPS)の管理・運営があります。この標本庫は、時代とともにその所属が変わってはきましたが、宮部金吾のコレクションに端を発する、由緒正しいハーバリウムです。また、多くのボランティアの方々によって新たな標本が日常的に配架・蓄積されていくシステムが確立されている、全国的に見ても活動的な標本庫の一つであると思います。多量の整理済・未整理標本と配架システムがあれば、植物標本の先進的な管理・活用方法の研究や、新知見をもたらす新たな発見も期待できるでしょう。実際に、この3か月でいくつかのお宝標本も発見されています。今後は、これらの標本を活かして、陸上植物全般を分類群に拘ることなく扱った研究を行っていきたいと思っています。また、植物分類学、植物標本、保全の普及啓発活動にも積極的に携わっていきたいと思っています。

このような国内でも指折りの標本庫の管理を、僕のような若造が務めてよいのか不安に思

うときもありますが、逆に言えば若者が長く付き合うことで標本庫にとってよい面もあると信じて、標本庫の維持・発展に務めていきたいと思っています。

着任したばかりなのはもちろんですが、大学教員を経験するのは初めてです。その上、北海道に住んだこともありません。しばらくは教職員、研究員、ボランティア、学生の皆様にご迷惑をおかけしてしまうこともあるかもしれませんが、成長したら使い勝手のよい教員に育つと割り切り、温かい目でご指摘いただけますと大変幸いです。今後とも宜しくお願いいたします。



研究材料の一つ、ヒトツバイイチヤクソウ *Pyrola subaphylla* Maxim. (2012年7月20日、初めて北大総合博物館を訪れた翌日に札幌市内で撮影)

洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会と相互協力協定を締結

●2018年12月18日

平成30年12月18日(火)洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会と、相互の発展に向け、連携・協力関係を深めることを目的として、相互協力協定を締結しました。

調印式には、洞爺湖有珠山ジオパーク推進協議会から、真屋敏春会長(洞爺湖町長)、村井洋一副会長(豊浦町長)、菊谷秀吉監事(伊達市長)、佐藤秀敏監事(壮瞥町長)、総合博物館からは中川光弘館長、山本順司准教授が出席しました。

洞爺湖有珠山ジオパークは、洞爺湖と有珠山を中心に、火山が作りだした地質景観、災害との共生や縄文遺跡等、地域の歴史文化

的側面を見所としたユネスコ世界ジオパークに認定されている地域です。

本協定により、当館では、ジオパークというフィールドを利用した研究活動の広がりが期待されます。また、ジオパークとしては、その地球科学的価値が、学術研究によって保障されることから、当館との連携に大きな意義があります。さらには、双方が行う教育活動や、地域振興への波及、自然災害へのリスク軽減など、多方面への効果が期待されています。

今後は、洞爺湖有珠山ジオパークの普及啓発、地域振興など幅広い分野において連携・協力を進め、相互の発展を目指すものとします。



浪塚良平
(事務部／学術担当補佐)

むかわ竜全身復元骨格完成

むかわ竜は、北海道むかわ町穂別で発見された国内最大の恐竜全身骨格です。平成25年7月に、ハドロサウルス科の尻尾化石が確認され、その後、平成26年と27年の夏に、むかわ町穂別博物館と北海道大学総合博物館を中心に大規模な発掘を行いました。その結果、幅4メートル、長さ7メートルの範囲から、全長8メートルの大型恐竜の全身骨格が発見されたのです。その後、主に、北海道大学総合博物館とむかわ町穂別博物館で、骨化石の周りについている岩を取り除くクリーニング作業を行いました。平成30年9月にクリーニング作業が終了し、全体の8割を超える骨が保存されている、日本恐竜発見の歴史上最も完全な恐竜化石であることを確認しました。

クリーニング終了後、北海道大学総合博物館 小林快次教授の監修のもと、むかわ町は、むかわ竜の骨すべてのレプリカを作り、それを



復元中のむかわ竜の頭



復元されたむかわ竜の全身骨格

使って組み立て骨格を作る計画が立てられました。むかわ竜の骨の数が多いことと、その大きさから組み立て骨格を作るには、大変な時間と労力がかかりました。シリコンなどの材料を使って、二百以上の骨の型取りを丁寧に行います。その型(モールド)に樹脂を注ぎ、レプリカを作成します。作られたレプリカは、本来の化石に近い色が塗られ、実物の化石に忠実に再現しています。いくら完全に近い骨格と言っても、保存されていない部分もあり、解剖学的視点で間違いのないように、二百以上の骨を組み上げていきました。特に、頭の鼻先(吻部)と腰(仙椎骨)、そして尻尾の先が保存されていなかったため、それらは近縁な恐竜を参考にして復元しました。組み立て骨格の姿勢は、前肢を地面につけゆったり歩いている「海岸線をのんびり散歩しているポーズ」を意識して、

デザインされています。組みあがった骨格は、高さ4メートルを超え、長さは8メートルにもなります。非常に迫力のある組み立て骨格となり、むかわ竜の大きさが実感できます。

この骨格は、令和元年の夏に、国立科学博物館の特別展示「恐竜博2019」で一般公開されます。それに先立って、平成31年4月11日に、むかわ町穂別博物館は、この全身骨格の完成をメディアに披露し説明しました。

現在、北海道大学総合博物館とむかわ町穂別博物館は、むかわ竜の研究を行っており、新属新種の検討や世界の恐竜における意義などの研究を進めています。

小林快次
(研究部教授／古生物学)

馬渡駿介名誉教授が
「第29回南方熊楠賞」を受賞

馬渡駿介名誉教授(元総合博物館館長)が、「第29回南方熊楠賞」を受賞されました。南方熊楠賞は、和歌山が生んだ知の巨人、南方熊楠の偉業をたたえて制定された賞で、馬渡名誉教授の国内外での分類学発展への貢献が高く評価され、このたびの受賞となったものです。

馬渡名誉教授は北海道大理学部を卒業後、約半世紀にわたって無脊椎(むせきつい)動物の分類学に関する研究に取り組んできました。特に「コケムシ」の分類では、世界中の標本との比較研究で成果を上げ、これまでに

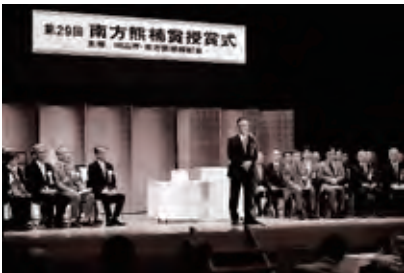
も日本動物学会賞や日本動物分類学会賞などを受賞しています。

馬渡名誉教授は受賞のコメントで「巨人の名を冠した賞を、足下にも及ばない私がいただくことの責任の重さを痛感しています。熊楠翁は主に粘菌、私は無脊椎動物と研究対象は異なりますが、巨人と同じ分類学に親しんだことは私の誇りです。」と喜びを語りました。

5月11日(土)に行われた授賞式では、和歌山県田辺市の紀南文化会館において、馬渡名誉教授が「ヒトの目にとまらない生き物たち」のテーマで記念講演を行いました。



授賞式での馬渡名誉教授(右)



スピーチをする馬渡名誉教授(中央)

K39:考古学からみた北大キャンパスの5,000年

●2019年7月19日～ 9月29日

総合博物館では、2019年7月19日(金)～9月29日(日)の会期で「K39:考古学からみた北大キャンパスの5,000年」展を開催しています。北大札幌キャンパスはそのほぼ全域が埋蔵文化財包蔵地、つまり遺跡に登録されています。そのため、新たに建物や道路を建築・敷設する際には、事前に埋蔵文化財に関する検討・調査が必要です。本企画展示タイトルの「K39」は、北(Kita)区にある札幌市の登録番号39番の遺跡、K39遺跡に由来します。その範囲は、植物園を除くキャンパスの大部分にあたります。本企画展示を共催いただく埋蔵文化財調査センター、およびその前身の埋蔵文化財調査室によるこれまでの発掘調査で、このキャンパスには、縄文中期(約5,000年前)以降の文



企画展示エントランス



海外からの来館者の理解を助けるためにパネル・キャプションは全て日英併記としました。

生体展示

「小さな小さなホ乳類 北海道のトガリネズミ」

●2018年10月12日～ 12月2日

2017年の11～12月には生体展示「小さな小さなホ乳類 北海道のトガリネズミ」が開催され大好評でした。周知期間もほとんどなかったのに想定の結果でした。これを受けて、2018年度にも是非ともトガリネズミの生体展示をしようと共同研究者の河原敦さんと計画しました。しかし、前年度と全く同じ内容では進歩がないので、2018年度は展示内容を拡大して行うことにしました。

トガリネズミ類はモグラやハリネズミの仲間、おもに北半球の冷涼な地域に360種以上が生息しており、北海道には4種のトガリネズミ類が生息しています。そのうちの一種が世界最小の陸棲哺乳類であるトウキョウトガリネズミ(チビトガリネズミ)です。しかし、トガリネズミ

展示されていた“スター”のトウキョウトガリネズミ(チビトガリネズミ)。



類の存在はもとより生態については、一般にはほとんど知られていません。生体を観察したことがある人に至っては極めて稀です。そこで本企画では北海道産の4種のトガリネズミを同時に展示し彼らの間の形態と行動の違いを見せよう、という世界初の試みを行いました。

本展示は訪問者からは驚愕の反応をもって迎えられ、予定を延長し2018年10月12日より12月2日までの期間行われました。



北大式土器(写真:石崎幹男氏)

本企画展示では、主にK39遺跡から出土した土器や石器などの遺物、そして発掘調査時に確認された地層の剥ぎ取り標本や、続縄文文化の屋外炉、擦文文化の竪穴住居のカマドと煙道の復元モデルを展示して、私たちの足元の世界で営まれた人々の生活の歴史について紹介します。ぜひキャンパスに点在する調査地点の跡地にも足を延ばしていただき、この地に生きた人々の息吹を感じ取っていただければと考えています。

江田真毅
(研究部准教授／動物考古学)

本博物館では生きた動物を展示するための体制はありません。今回も前回に引き続き北大の学部生を中心の5名にボランティア協力いただきました。彼らは正式な博物館ボランティアには登録されていませんが、彼らの活躍があったこともここに記しておきます。

大館智志
(資料部研究員／低温科学研究所)



餌替えの時には多くの個体が巣からでてくるので人だかりになることも……

没後80年記念展
比田井天来
北海道大学総合博物館
―書・拓本―所蔵コレクション
●2019年1月16日～ 2月17日

2019年1月から2月にかけて、《近代書道の開拓者》《現代書道の父》と称される、長野県出身の書家・比田井天来(1872～1939)の「没後80年記念展」を、1階企画展示室で開催しました。

博物館所蔵コレクションのうち、天来の書(額・軸)と拓本(原拓)が公開され、主催は同博物館、後援は東京の天来書院等、同館の大原昌宏教授や研究支援推進員が中心となって企画を進め、山中草叶・岡田大岬が主として展の設営にあたりました。

今回の展示で特に注目されたのは、博物館のコレクションに加えて、総長室蔵の《天来書・六曲屏風》を展示したことです。これは、中国宋の三代皇帝であった真宗の「勸学文」



10行を天来が揮毫したものです。

今回の展示趣旨については、博物館のパンフレットに端的に述べさせていただきました。「平成16年、書道家・金津墨岱氏のご遺族から約300点に及ぶ屏風、草書掛け軸、墨象・拓本の寄贈を受けました。それらの貴重なコレクションの整理と分類を進めながら収蔵保管を行ってまいりましたが、一般に展示公開をするまでに至っておりませんでした。／また、北海道大学では総長室に比田井天来氏の六曲屏風を所蔵しておりました。／本年は、日本を代表する書家である比田井天来氏没後80年にあたります。これまで一般に公開をされていなかった金津墨岱氏コレクションの一部と総長室蔵の六曲屏風を展示公開致します」。

岡田大岬
(元資料部研究員)

フローラ ヤポニカ
北海道植物画展
●2018年11月10日～ 12月9日

2018年11月10日～ 12月9日の間、標記の展示を1階の企画展示室で開催しました。

2016年にイギリスの王立キュー植物園でフロラ・ヤポニカ展が開かれ、日本の植物画家や植物学者による作品や原画などにより日本の植物が紹介され、2万人以上の来館者があったといします。この後、日本の国立科学博物館でも2017年9月12日から12月3日までの期間で企画展「フローラ ヤポニカ 日本人画家が描いた日本の植物―」が開催されこれもまた好評を得ました。

以上の日英での2回の植物画展示を受け、北海道でも植物画(ボタニカル・アート)を紹介する展示を企画しました。今回の展示では、英国の展示において日本人植物画家として選ばれた北海道の2名(早川尚・福澤レイ)の作品を中心に、北大植物標本庫に所蔵されている植物画工による原画や植物画関連図書等を展示し北海道の植物を紹介しました。

具体的には、上述の植物画家2名の原画



40点を壁4面に吊り下げ、来館者が時計と反対方向で観覧できるようにしました。これに加え、展示室中央部に展示ケース2台を配置し植物解剖図や、英国での展示図録、植物学専門誌、植物画集、パレット・水彩絵の具・筆といった使用道具などを展示しました。空間を広くとることで、展示室全体の雰囲気落ち着いたものにでき、熱心に植物画に見入る入館者の姿が見られました。今後とも秋の芸術展示として植物画が定着すれば何よりです。

高橋英樹
(資料部研究員／名誉教授)

写真パネル展
「エゾリス～冬を生きる～」開催
●2019年2月23日～ 4月14日



北海道を代表する哺乳類のひとつであるエゾリスは、その愛くるしい形態と行動から、北海道の生物多様性理解のためのマスコット的存在として人気者になっています。旭川在住の自然写真家・南 尚貴氏のご協力により、エゾリスの写真、20点を展示する写真展および講演

会を開催しました。昨年の「シマエナガ」に続き、北海道の生物多様性、自然環境について、その将来の研究と保護への理解を促す機会となりました。会場には、多くの来館者があり、コメントボードには海外からの観光客の感動の意見が多く寄せられました。3月17日の講演会には30人の参加があり成功裏に終了いたしました。

南 尚貴氏には多大なご協力をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

期間：2019年2月23日から4月14日まで
(43日間)
会場：1階企画展示室
来場者数：22,544人

大原昌宏
(研究部教授／昆虫体系学)

常設展示
収蔵標本の世界
3階常設展示「収蔵標本の世界」では、総合博物館が所蔵する300万点を超える標本の一部を展示しています。前号に引き続き、展示室毎に取り上げ、紹介してまいります。

医学標本の世界

北大総合博物館では2007年1月よりロウ製皮膚病模型moulage(ムラージュ)の常設展示を行っています。本邦では極めて珍しいムラージュ常設展示についてご案内します。



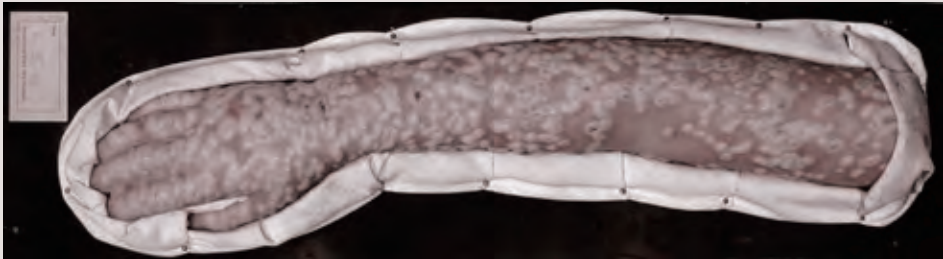
医聖ヒポクラテス
(紀元前400年頃)

ムラージュとは「型による成形」という意味のフランス語です。カラー写真の無い時代に症例の記録や医学教育の為に盛んに用いられました。医聖ヒポクラテス(紀元前400年頃)は医師の技術について「過去の症状を説明し、現在の症状を理解し、将来を予測すること。以上のことに習熟すること。」と述べています。このようにヒポクラテスの時代から、過去の症状を記録することは医術の基本でした。我々は生活の中に様々な「模型」見ることができますが、医学の場でも目的に特化した「模型」を利用することが多くあります。本格的な人体模型は16世紀に始まり、17世紀に解剖模型が、18世紀にムラージュが、そして現代の手術トレーニングセットや3Dプリンターによる超精密臓器模型も同じです。これらは全てヒポクラテスの言う「医師の技術」を向上させる目的に特化した「模型」なのです。

18世紀に始まるムラージュの中でも、皮膚病ムラージュは最も盛んに製作されました。こ



展示室全景

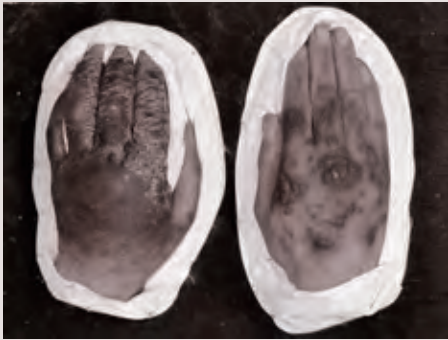


地球上から根絶された天然痘のムラージュ

の皮膚病ムラージュの発展には、文豪ゲーテ(1749－1832)が深く関わるなど、歴史的に大変興味深いものです。皮膚病ムラージュは第1回皮膚科学国際会議(1889年パリ)で出品され、世界中の皮膚科学者の絶賛を得ました。しかし、当時その製作法は最先端技術であり、厳しく秘匿され一子相伝のように扱われていました。また多大な労力と財力を必要としたため、多数を保有できたのはごく一部の大学や大病院に限られました。日本へは1898年(明治31年)に東大皮膚科初代教授土肥慶蔵により、その製作法と共に紹介されています。北大皮膚科は1923年(大正12年)に北海道帝国大学皮膚泌尿器科として開講、初代教授志賀亮により開講翌年にはムラージュ製作に着手し、1960年代まで製作されました。しかし、戦火や災害、経年劣化などで多くを喪失し、現在260点程が北大総合博物館で保管されています。中には現代では希な疾患や1980年にWHOから根絶宣言がなされた「天然痘」の皮膚病ムラージュも展示してあります。「天然痘」は感染力が強く、致死率の高い疾患として紀元前から世界中で恐れ



北大皮膚科初代教授
志賀 亮先生



ナイアシン欠乏症であるペラグラのムラージュ

られていましたが、種痘の発見により1977年ソマリアの症例を最後に地球上から消滅しました。そのため「天然痘」を直接目にする唯一の手段がこのムラージュであり、学術的に極めて貴重な資料となっています。

症状の記録や医学教育に盛んに利用された皮膚病ムラージュは精巧を極め、芸術の域にまで達しました。膨大な時間と高い技術で作成された皮膚病ムラージュを前にして、見学者はその再現力の高さに驚愕し、目を背けたくなるかもしれません。しかし、見学者が皮膚病ムラージュの医学的、歴史的、芸術的価値を知るのみで無く、その驚異的な精密さを目の当たりにして、人間の「病」に対する恐怖、「健康」を求める為に発揮しうる膨大なエネルギーを認識するよう導くことが本展示の目的です。

中村秀樹
(北大医学部助手)

学生企画ミュージアムグッズ

2017・2018年度の大学院授業から次々と誕生

2017年度・2018年度の北海道大学大学院の授業「博物館コミュニケーション特論 ミュージアムグッズの開発と評価」から、3つの新たなグッズと、ショッパー、学生企画グッズのロゴが生まれ、ミュージアムショップで販売・展開開始しています。いずれもニーズ調査を実施し、学生の発想で実現しました。

1つは、3名の大学院生が企画開発した「鉱物蠟燭」です。2017年から2年かけてさまざまな方にご協力いただいて完成させました。モデルは館内に展示されている日本式双晶。解説やパッケージも学生が手がけました。「博物館の展示物を持って帰る」、そんな夢が、研究者も驚く精巧さで実現されています。石の台座もセットで販売されています。

2つ目は、2名の大学院生と1名の学部生が企画開発した「総合博物館タンブラー」です。デザインは「標準ラベル」と「研究者のトランク」の2種類。両面に印刷されており、差し替えられます。総合博物館らしいシックなデザイン。モチーフの解説も付いています。学生達のアイディアはカフェとの連携企画に発展しました。タンブラーにはミュージアムカフェで利用できる無料の1ドリンク券(コーヒーまたはカフェラテ)がついている他、カフェでこのタンブラー利用すると、毎回、コーヒーまたはアイスコーヒーの増量サービスが受けられます。

3つ目は、5名の大学院生が企画開発した巾着「まなびのむすび」です。「まなびのむすび」という名称には、学びの場として総合博物館を見学していただいた終わり(まなびのむすび)にショップで巾着を選んで持ち帰り使用していただくことで、来館者と制作した学生、来館者と総合博物館を結びたいという思いが込められています。デザインは次の3種類です。海

藻分類学の拠点である総合博物館の貴重なコレクションとその歴史ある研究の一端をご紹介したいと、海藻標本をモチーフにその色も意識したデザイン。研究の成果だけでなく、その営みに思いを馳せていただきたいと、古生物学を例にして研究の始まりを道具で表現したデザイン。そして、1909年に建造された歴史ある博物館の建物のなかでも印象深いアインシュタインドームの4点のレリーフをモチーフにしたデザインです。それぞれに解説シートが添えられています。

最後にご紹介するのはショッパーと学生企画グッズのロゴです。グッズと同様、ショッパーはショップ展開の大事な要素です。総合博物館らしいショッパーを実現しようと、5名の大学院生が、博物館のイメージ調査をもとにデザインしました。シンプルながら一目で総合博物館と分かり、大事にとっておきたくなる、そしてプレゼント用にラッピングしたくなる仕上がりです。この5名はまた、若きクラーク博士をイメージした学生企画グッズのロゴもデザインしました。2019年春以降に販売開始した学生企画グッズには、このロゴが配されています。ショップに並ぶ多数の魅力あるグッズのなか、ぜひこのロゴのついたグッズにも注目していただきたいと思います。

2017・2018年度

理学院専門科目・大学院共通科目

「博物館コミュニケーション特論

ミュージアムグッズの開発と評価」

●鉱物蠟燭

担当学生：大沢 啓人・古川 貴祥（総合化学院）、
藤川 雄基（生命科学院）



鉱物蠟燭(石の台座もセットで1,900円＋税)



総合博物館タンブラー（1,000円＋税）



ショッパーと学生企画ロゴ

協力：内原 麻実（工学部）、工藤 真隆（水産学部）
製作：倉場 政直（社会福祉法人 北ひろしま福祉会）
監修：山本 順司（総合博物館）
指導：湯浅 万紀子（総合博物館）

●総合博物館タンブラー

担当学生：清水 美帆（工学院）、遠藤 優（理学部）、楊 朝暉（文学研究科）
監修・協力：江田 真毅・大原 昌宏・山本 順司（総合博物館）
指導：湯浅 万紀子（総合博物館）

●巾着「まなびのむすび」海藻・研究道具・建物

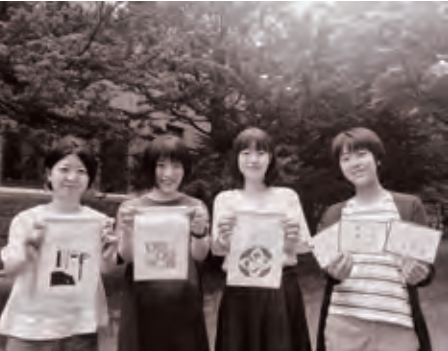
担当学生：相澤 明香里（環境科学院）、神田 いずみ（文学研究科）、雲中 慧・鈴木 花・山本 茉奈（理学院）
監修：阿部 剛史・小林 快次（総合博物館）、池上 重康（工学研究院）
指導：湯浅 万紀子（総合博物館）

●ショッパーおよび学生企画グッズロゴ

担当学生：野瀬 紹未・近藤 喜十郎（文学研究科）、安藤 瑞帆・細谷 祥央・濱崎 瑠菜（理学院）
指導：湯浅 万紀子（総合博物館）

湯浅万紀子

（研究部教授／博物館教育学）



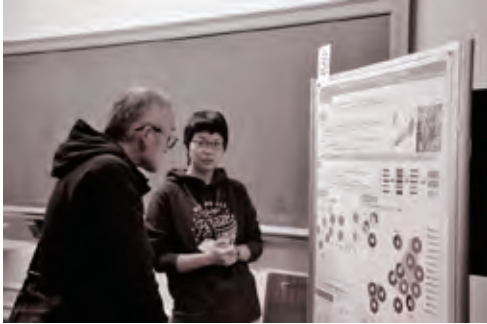
巾着「まなびのむすび」(各450円＋税)

卒論ポスター発表会

●2019年3月2日・3日

北海道大学の学部4年生が卒業研究を1枚のポスターにまとめ、来場者にわかりやすく発表して質問に受け答えする第11回「卒論ポスター発表会」が、3月上旬の週末2日間に館内の「知の交差点」エリアで開催されました。この取り組みは、本学の全人教育の一環として総合博物館が展開しているミュージアマイスター認定コースの社会体験型科目に位置づけており、コミュニケーション能力の涵養や異分野への関心の喚起、大学博物館への理解を深めることを目的としています。

発表には工学部4名、理学部3 名、農学部1名、文学部1名の計9名が参加しました。ポスターを完成させるまでに、中間発表会に参加して、当館の担当教職員の指導を受け、他の発表者や発表会を運営する学生とのディスカッションを重ね、内容やデザインを改訂しました。さらにさまざまな来場者を想定した説明のリハーサルにも参加しました。発表会当日は、来場者との対話を楽しみながら説明していました。発表会の運営もまた3名の大学院生と学部生が担当しました。発表者のメッセージなどを掲載し、卒業の春をイメージさせるデザインのプログラムを制作した他、当日は司会や受付を務め、会をスムーズに運営しました。発表会の最後には、2日間の来館者の投票による「来館者賞」、ミュージアマイスター 6名が選定する「ミュージアマイスター賞」、市民5名と本学役員・教員5名から成る審査員の評価による「最優秀賞」を決定し、表彰式と講評会を行いました。「来館者賞」と「ミュージアマイスター賞」は工学部の福山健さんが、「最優



来場者に説明する4年生

秀賞」は理学部の遠藤優さんが受賞しました。

来場者には、さまざまな学部の4年生の研究成果と研究に取り組む姿を知っていただく機会となりました。学生の事後考察レポートには、コミュニケーション能力を身に付ける機会になっただけでなく、研究の意義を見直したり、他分野の学生の研究を知ったり、来場者と交流する貴重な機会となったこと、そして発表会を運営した意義や課題などが綴られています。準備のプロセスや当日の様子、事後考察レポートは当館ホームページで公開しています。
<https://www.museum.hokudai.ac.jp/education/museummeister/cat/project/poster/>

●発表者

田邊 美寿々（工学部 環境社会工学科）
「学部施設との関係からみた北海道大学札幌キャンパスにおけるオープンスペースの変遷と特徴」

鈴木 伶音（理学部 地球惑星科学科）
「董青石がひらく火山研究の新しい可能性」

片岡 奈々（農学部 生物資源科学科）
「世界で積丹、松前、下北にしかない絶滅危惧植物オニトコヨモギの保全―紛らわしい普通種との比較から―」



会場風景「知の交差点」

福山 健（工学部 応用理工系学科）
「最新鋭の石炭発電で発生する塩化水素ガスの高効率な吸収剤の性能評価 ～蜂の巣状の物質と安価な天然ソーダ灰を用いて～」

遠藤 優（理学部 生物科学科）
「外来種ハクビシンの日本移入と分布拡大の解明」

宮地 広太郎（工学部 環境社会工学科）
「北海道大学札幌キャンパスにおける農場の土地利用と景観の変遷」

小畑 悠紀子（文学部 人文科学科）
「ことばと思考の世界：ことばが違くと、世界の見え方も違う？」

田次 将太（理学部 地球惑星科学科）
「南西北海道、狩場火山群の地質学・岩石学的研究：山体形成史とマグマ変遷の解明」

渡辺 美季子（工学部環境社会工学科）
「建築設計競技European（ヨーロッパ）のテーマ・敷地選定の特徴と変遷」

●運営担当学生

酒井 涼香（水産学部）、松田 真莉子（文学研究科）、
宗像 みずほ（理学部）

湯浅万紀子

（研究部教授／博物館教育学）



高橋英樹先生を囲んで

湯浅万紀子

（研究部教授／博物館教育学）

2018年度第2回

ボランティア講座＆交流会

●2019年2月24日

16グループで活動している230名の博物館ボランティアに、所属グループ以外の博物館活動にも関心を広げたり、相互交流を図っていただくため、博物館ではボランティア講座＆交流会を開催しています。

2018年度第2回は、2018年度末に退官された高橋英樹特任教授を講師にお迎えして

開催しました。高橋先生が学部と大学院、植物園に在籍されていた頃の研究、そして総合博物館の草創期から現在に至るまでの研究や博物館活動について、多数の写真やデータをご紹介いただきながら、時代背景とともにその時々を思いを語っていただきました。先生をはじめ総合博物館に関わってこられた多くの方のご尽力やご協力があって、現在の総合博物館があることを改めて思い、参加者とともに先生に感謝する時間になりました。そして、博物館の置かれている厳しい状況や、それ乗り越えて進んでいく未来についても、参加者と考える時間にもなりました。

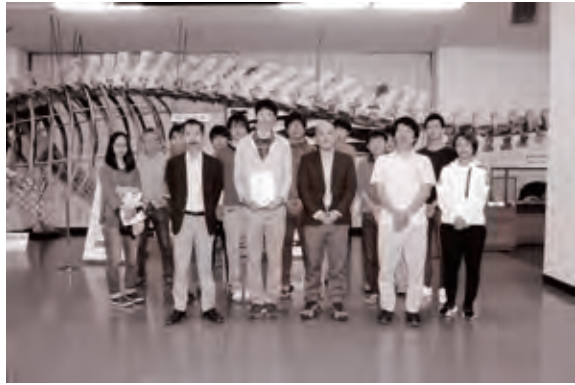
2018年度

総合博物館
活動報告会

●2019年3月18日



中川光弘館長とボランティア表彰者



水産科学館今村央館長、田城文人先生、河合俊郎先生とボランティア表彰者、学生ボランティアメンバー

2018年度総合博物館活動報告会が、年度末3月に館内の大教室で開催されました。中川光弘館長の挨拶に始まり、ボランティア表彰式が行われました。5年表彰対象者は22名、10年表彰対象者は7名ですが、表彰式にご参加下さったのは川田光政さん・木村聖子さん・木村映陽さん(5年)と石川恵子さん・塚田則生さん(10年)の5名でした。この5名から、ボランティア活動への思いや活動を支えて下さった仲間と教職員への感謝が述べられました。後日、水産科学館では木村克也さん(5年)が今村央館長から表彰を受けられました。

湯浅万紀子研究部長による博物館全体の活動報告、資料部の秋元信一郎長による資料部報告に続いて、理学院修士課程の徳丸沙耶夏さんが「博物館ボランティアの研修プログラムの検討ー北海道大学総合博物館におけ

る『展示解説者体験プログラム』の実践を通して』について研究報告を行いました。このプログラムに参加した市民の方々はその後、総合博物館の展示解説ボランティアグループに登録し、毎月のグループによる解説を担当しています。参加者の渡部典子さんは「徳丸さんのプログラムに参加して、展示解説ボランティアとして活動を続け、人生がより豊かになりました」と感想を述べられました

最後に、ボランティアメンバーから、在田一則ボランティアの会会長による会の活動報告、森本智郎さん(考古(骨)グループ)による「年次活動報告」、濱崎瑠菜さん・種市晟子さん(ハンズオン)による「ワークシート『感じる展示室図鑑』の運用」、臼田みゆきさん(化石)による「クジラのクリーニング」、志津木真理子さん(昆虫)による「『標本から見る 北海道の水生

昆虫』展」の報告がなされました。各グループの問題関心の広がりや深まりが感じられる報告でした。

本報告会は、多岐にわたる博物館の研究・教育・活動についてその一部ではありますが、約60名の参加者と共有し、互いの活動を理解し、次の年度へと活動展開していく気持ちを新たに作る機会になったのではないかと考えます。

報告会に続いて、中川光弘館長と高橋英樹特任教授の退任記念講演会が開催されました。先生方からのメッセージは本誌巻頭記事をご覧ください。

湯浅万紀子

(研究部教授／博物館教育学)

コンセプトカー展示と試乗体験

●2018年11月16日～ 11月18日



北海道大学(北大)及び科学技術振興機構(JST)は、内閣府による革新的研究開発推進プログラム(ImPACT)の一つ「超薄膜化・強靱化『しなやかなタフポリマー』の実現」プログラムで創出した新素材「しなやかなタフポリマー」を随所に活用した電気自動車(EV)の革



新的コンセプトカー、“I to P (Iron to Polymer, アイトップ)”の展示・試乗会を2018年11月16日から18日にかけて北大総合博物館にて開催しました。北大先端生命科学研究院、ソフト&ウェットマター研究室の「犠牲結合原理によるソフトマターの強靱化」に関する研究成果

がタイヤに応用されています。ゴムの強靱化によって、ゴム厚を減少することが可能となり、タイヤの軽量化・省資源化に寄与します。また、繰り返し変形に対するエネルギーロスが少ないことから走行時の省エネルギーにも貢献します。17日(土曜)にはプレス・関係者向け試乗会を開催し、初雪前の中央ローン周回路においてコンセプトカーを走行させました。ナンバープレートを取得していないコンセプトカーが、見学者の近くを走行する貴重な機会となりました。

展示期間中、大勢の見学者が訪れ、博物館内特設展示室を閲覧した人数は延べ328名、コンセプトカーに着座した人数は延べ438名でした。

黒川孝幸

(先端生命科学研究院教授)

2018 第2農場のガイド付きツアー

●2018年10月28日～ 11月3日



受付の様子と解説の様子



第2農場のガイド付きツアーを2018年10月28日(土)～ 11月3日(土)の8日間、午前と午後の1日2回実施いたしました。余り天候に恵まれず、参加者は総計150名余りで、昨年のおよそ半数となってしまいました。特に、10月30日(火曜日)午後は雨交じりの荒天のため、参加者が現れず中止ということになってしまいました。解説担当のボランティアさんは、渡部、石田、大山、稲場、石川、寺西、宇井、大沼、橋爪

の各氏9名が、最も多い方は16回中12回も担当いただきました。皆様の熱意・ご活躍には頭が下がる思いです。

事後のアンケートでは、催しを知ったのは北大や博物館のHPが36%と最も高く、参加者の世代では50～69歳が最も多く、まだ道内の方が69.3%、さらに海外の方が2名おられました。また参加は2度目、3度目というリピーターが30%近くおられました。

コメントでは全体に非常に好評で、「非常に良かった」「良かった」をあわせると、どの項目も90%以上でありました。なお、説明文の記述や展示方法にもう一工夫ほしいという意見も2～3人の方から寄せられており、今後の課題となりました。

近藤誠司

(資料部研究員／名誉教授)

ミュージアムコンサート

ポプラチェンバロとリコーダーの調べ

●2019年5月29日



水曜日の14時から、ふだんは30分ほどのチェンバロのミニコンサートを行っておりますが、5月29日(水)に行われたコンサートでは、国内外で活躍されているリコーダー奏者の松浦孝成さん、中野聖子さんをゲストにお迎えして、バロック時代のリコーダーの作品をチェンバロと共に、演奏しました。

開場前から演奏を楽しみに来られた多くの方が列を作り、たくさんのお客にご来場頂きました。松浦さんによるリコーダーの説明、作品の解説も皆様聞きながら、熱心に聞いてもらっていました。

小学校、中学校で一度は吹いたことのあるリコーダーが、記憶の中にあるリコーダーを飛び越えて、素晴らしい作品があることに驚かれた方もいらっしゃる、あらためてリコーダーという楽器が織り成す多彩な響きとポプラチェンバロの音色を、皆様に楽しんで頂けた一時でした。

終演後は、多くの方がチェンバロを囲み、倒れたポプラで作られたことに驚き、様々な質問



もあり、皆様に気軽に触れて頂けることも喜ばれました。時期的に、温度、湿度も上がり、チェンバロの状態も落ち着かず、心配でしたが、無事終了することが出来ました。

これからも、チェンバロのご機嫌と向かいながら、コンサートを通し、来館される方々にポプラチェンバロを紹介し、音色を楽しんで頂けたらと思います。

新妻美紀

(ボランティア)

宇宙の4Dシアター

●12月15日、3月16日

写真左 紅組白組の司会に扮したメンバーの佐藤さんと長谷川さん(12月公演)

写真右 光るベルトを巻いて女神ジャウザー(オリオン座)を演じるメンバーの石神さん(3月公演)



体験型展示プログラム「宇宙の4Dシアター」公演を12月15日および3月16日に開催しました。年末スペシャル公演「ちょっとはやめの紅白歌合戦 星が大集合!」と題した12月公演は、学生ボランティアの佐藤伽奈さんとミュージアマイスター学生参加プロジェクトの長谷川健太さんが紅白歌合戦の司会に扮した掛け合い形式のナビゲーター(解説)、同じく学生参加プロジェクトの増田理乃さんがパイロット(機器操作)、永井陸さんが音楽演出をそれぞれ担当しました。男性／女性歌手の星(ス

ター)にまつわる歌をテーマにした公演は、大晦日の歌合戦を先取りする企画となりました。3月公演は「アラビア星」というタイトルで、ボランティアの増田文子さんのシナリオ、佐藤さんのパイロットで実施しました。あまり知られていないアラブ文化圏の星の伝説を紹介しつつメンバーによる演劇を挟む構成で、生き生きとした取り組みになりました。いずれの公演も各回の整理券がすぐに無くなるほどの盛況さで、総合博物館4Dシアター公演の人氣が定着していることがうかがわれました。



公演の広報や会場準備等は、4Dシアター運営ボランティアグループに参加するメンバー全員で実施しています。活動は月2回の定例会と2～3カ月ごとの公演です。4Dシアターボランティアにご関心のある方はぜひお気軽にお声掛けください。次回の公演にもどうぞご期待ください。

山下俊介
(研究部助教／映像資料学)

誘導灯設置プロジェクト～ご支援へのお礼とお願い

私どものクラウドファンディングプロジェクト「北海道大学の博物館をもっと明るく!～北大生がデザインする照明で市民の憩いの空間を～」ご賛同を賜り、多大なるご支援を頂戴しましたことを心より感謝申し上げます。お

かげさまで、94人の皆様からあわせまして、1,637,500円のご支援をいただき「照明付き置き家具(誘導灯)」の試作に成功いたしました。今後、この誘導灯を博物館前庭にどんどん設置していきたいと思います。第1号基の設置は



写真1 ミニチュア版誘導

2019年4月22日。耐寒耐雪性能を確認するため屋外で冬を越させた試作品をテストフィールドの雪の中から掘り起こし、博物館前庭に設置しました。みんなの想いが結実した瞬間でしたが1基だけではあまりにも頼りなげな灯に映りましたので、2019年6月11日、開発メンバーの出資によって前庭に1基、さらに博物館内の展示室にも1基設置しました(写真1)。最終目標としては博物館前庭に18基の誘導灯を配置し、皆様に冬でも温かくお迎えできる空間をつくり出していきたいと考えております。さらなるご支援を心よりお願い申し上げます。

＊ご支援いただいた皆様のお名前は当プロジェクトにお力添えいただいたメンバーとして新たに設置する誘導灯や展示室の芳名パネルに刻ませていただきます。

資料はこちらから
ご覧いただけます。



<https://www.museum.hokudai.ac.jp/outline/building/lightup/>

山本順司
(研究部准教授／地球科学)

平成30年度
後期記録

バイオメティクス市民セミナー
「北海道とバイオメティクスを考える その7 持続可能なパッケージング」
内村 元一(日本製紙株式会社 技術調査役)
辻井 薫(元北海道大学電子科学研究所 教授)
日時:11月3日(土) 13:30～15:30
参加者:64名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「高齢社会と相続法」
藤原 正則(北海道大学 大学院法学研究科)
日時:11月10(土) 13:30～15:30
参加者:60名

バイオメティクス市民セミナー
「北海道とバイオメティクスを考える その8 動物と人との関係誌」
大館 智志(北海道大学低温科学研究所・大学院環境科学院 助教)
河原 淳(環境省希少野生動植物種保存推進委員)
日時:12月1日(土) 14:30～16:00
参加者:65名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「どうなる?地域に残る標本たち:人口減少期の地方博物館と自然史研究の未来」
持田 誠(北海道大学総合博物館 資料部)
日時:12月8日(土) 13:30～15:00
参加者:70名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「森林の変遷 ―昭和和新山で語る―」
春木 雅寛(北海道大学総合博物館 資料部)
日時:1月12日(土) 13:30～15:00
参加者:72名

公開シンポジウム
「ミュージアムが公共空間を彩る」
笠置 秀紀(株式会社小さな都市計画)
宇野 君平(成安造形大)
大原 昌宏(北海道大学総合博物館)
畠 誠(北広島市エコミュージアムセンター)
高野 温子(兵庫県立人と自然の博物館)
中瀬 敷(兵庫県立人と自然の博物館)
日時:1月12日(土) 14:00～17:30
参加者:70名

バイオメティクス市民セミナー
「北海道とバイオメティクスを考える その9 北海道の自然と環境」
黒田 未来雄(株式会社NHKプラネット北海道支社 制作部)
渡部 友子(市立札幌大通高校 生物部)
日時:1月13日(日) 13:30～15:30
参加者:88名

バイオメティクス市民セミナー
「北海道とバイオメティクスを考える その10 持続可能な街づくり」
谷口 守(筑波大学 システム情報系社会工学域 教授)
小林 大二(千歳科学技術大学
理工学部情報システム工学科 准教授)
日時:2月9日(土) 13:30～15:30
参加者:32名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「終末期医療と刑法
―安楽死・尊厳死問題を中心に―」
城下 裕二(北海道大学 大学院法学研究科)
日時:2月9日(土) 13:30～15:00
参加者:80名

バイオメティクス市民セミナー
「北海道とバイオメティクスを考える その11 生物誕生の根源と生物の可能性」
倉本 圭(北海道大学大学院理学研究院 教授)
与那嶺 雄介(北海道大学電子科学研究所 助教)
日時:3月2日(土) 13:30～15:30
参加者:64名

北大総合博物館主催土曜市民セミナー
道民カレッジ連携講座
「身近なショウジョウバエの話」
渡部 英昭(北海道大学総合博物館 資料部)
日時:3月9日(土) 13:30～15:00
参加者:70名

平成30年9月から平成31年3月までに
行われたパラタクソノミスト養成講座

「きのこパラタクソノミスト養成講座(初級)」
小林 孝人(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:10月13日(土) 定員:10人
対象:中学生以上(参加者9名)

「イネ科 パラタクソノミスト養成講座(初級)」
佐藤 広行(北海道大学総合博物館 資料部研究員)
日時:2月16日(土) 定員:12人
対象:大学生・一般(参加者12名)

写真パネル展「エゾリス～冬を生きる～」講演会 & ギャラリートーク 開催
3月17日
中川光弘館長退任
高橋英樹特任教授退職

写真パネル展「エゾリス～冬を生きる～」講演会 & ギャラリートーク 開催
3月17日
中川光弘館長退任
高橋英樹特任教授退職

入館者数(平成30年10月～平成31年3月)

	入館者数	見学 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
10月	23,632	49	15	視ることを通して(～ 10/28) 小さな小さなホ乳類 北海道のトガリネズミ (10/12 ～)
11月	19,692	25	5	小さな小さなホ乳類 北海道のトガリネズミ 標本から見る北海道の水生昆虫(11/3 ～ 11/11) フローラヤポニカ 北海道植物画展(11/10 ～)
12月	10,821	16	5	小さな小さなホ乳類 北海道のトガリネズミ(～ 12/2) フローラヤポニカ 北海道植物画展(～ 12/9)
1月	11,311	6	2	没後八十年記念展「比田井天来」(1/16 ～ 2/17)
2月	11,835	8	3	写真パネル展「エゾリス～冬を生きる～」(2/23 ～)
3月	12,381	5	2	写真パネル展「エゾリス～冬を生きる～」

お礼

以下の方々に当館ボランティアとして学術標本整理作製・展示準備等でご協力いただきました。謹んでお礼申し上げます。

(平成30年10月1日～平成31年3月31日)

(敬称略)

●植物標本

石田愛子, 岩城瑞恵, 蝦名順子, 大原和広, 加藤康子, 桂田泰恵, 金上由紀, 菊地敦司, 児玉 諭, 駒谷久子, 坂上美裕己, 嶋崎太郎, 須田 節, 高岡さくら, 高橋美智子, 田端邦子, 中川博之, 新田紀敏, 林 裕子, 藤田 玲, 船迫吉江, 星野フサ, 細川音治, 本多丘人, 松本珠季, 道川富美子, 目黒嘉子, 吉中弘介, 與那覇モト子, 和久井彬実

●菌類標本

石田多香子, 加藤和子, 鈴木順子, 谷岡みどり, 外山知子, 星野フサ, 村上さつき

●昆虫標本

青山慎一, 伊藤優衣, 梅田邦子, 柏崎 昭, 川田光政, 喜多尾利枝子, 久万田敏夫, 黒田 哲, 斉藤光信, 櫻井正俊, 佐藤國男, 佐藤拓海, 志津木眞理子, 諏訪正明, 高橋誠一, 問田高宏, 永山 修, 伴光哲, 古田未央, 細川真里栄, 松本侑三, 村上麻季, 村田真樹子, 山本ひとみ, 芳田琢磨, 吉野優希

●考古学

青山美桜, 安 翔宇, 荒谷 博, 池澤 泉, 稲田 薫, 今井彩乃, 井宮淳恵, 江口暁彦, 遠藤 優, 翁 哲毅, 太田 晶, 大泰司紀之, 奥山杏南, 神田いずみ, 木内和秀, 木村則子, 木村映陽, 斉藤理恵子, 榊山 匠, 佐々木征一, 岸谷美恵, 謝 倩水, 末永義圓, 鈴木 花, ソンチャロエンチャイキットチョラウィット, 竹内 颯, 武田真緒, 田中公教, 田中望羽, 玉熊優菜, 成田千恵子, 二瓶寿信, 濱崎瑠菜, 林和花奈, 久井貴世, 平井麻理亜, 水澤こと, 宮崎真結, 森本智郎, 山本晶絵, 弓削龍之介, 渡辺双葉

●メディア

伊藤優衣, 鈴木里奈, 卓 彦伶, 武田満希, 藤井真知子, 三嶋 渉, 山田大隆, 山本ひとみ

●化石

朝見寿恵, 荒山和子, 安 翔宇, 飯島正也, 池上森, 石崎幹男, 泉 駆, 市橋晃弥, 糸井容子, 今井久益, 臼田みゆき, 宇津城遥平, 太田 晶, 大宮伶, 大村 颯, 小笠原玄記, 岡野忠雄, 尾崎美雪, 小田嶋一男, 尾上洋子, 金内寿美, 川又いづみ, 木村聖子, 木村映陽, 木村衛朋, 國廣亜矢子, 久保孝太, 近藤知子, 近藤弘子, 齊藤優里, 酒井光希, 酒井 実, 榊山 匠, 佐藤健一, 岸谷美恵, 清水洲平, 高崎竜司, 武田満希, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, 寺田美矢子, 寺西育代, 寺西辰郎, 中田悦子, 長瀬のぞみ, 長野あかね, 八丁目清之, 八丁目文枝, 福田祐生, 福地亮介, 本村美奈子, 前田大智, 三嶋一輝, 守屋友一朗, 山内静香, 山角美夏, 山下暁子, 山田佐穂

●北大の歴史展示

寺西辰郎

●展示解説

在田一則, 石黒弘子, 植松琉以, 太田 晶, 生越昭裕, 尾崎美雪, 河本恵子, 菅 妙子, 雲中 慧, 笹谷幸恵, 高崎竜司, 田中公教, 田中望羽, 千葉謙太郎, 塚田則生, 手島 駿, 寺西辰郎, 成田敦史, 西川笙子, 濱市宗一, 濱崎瑠菜, 松田義章, 村上龍子, 山崎敏晴, 山田大隆, ロバート・クルツ, 渡部典子

●翻訳

ロバート・クルツ

●平成遠友夜学校

遠藤大輔, 大山圭也, 柿本恵美, 城下治子, 須田力, 田中敏夫, 辻本文登, 中井玉仙, 沼田勇美, 牧野小枝子, 増田文子, 松田大徳

●4Dシアター

石神早希, 佐藤伽奈, 田中裕子, 塚田則生, 徳丸沙耶夏, 沼田勇美, 平田栄夫, 福澄孝博, 牧野小枝子, 増田文子, 三和優吾, 山上智子, 渡辺真理子

●ポプラチェンバロ

石川恵子, 小野敏史, 新林俊哉, 高橋美悠, 永野遼太, 新妻美紀, 野村さおり, 松田祥子, 雪田理菜子, 横倉伶奈

●図書

岡西滋子, 今野成捷, 須藤和子, 高木和恵, 田端邦子, 中井稚佳子, 沼田勇美, 久末進一, 鮎田久意, 星野フサ, 本名百合子, 宮本昌子, 村上龍子, 森 秀代, 山田大隆,

●第2農場

石田多香子, 稲場良雄, 宇井康子, 大沼良文, 大山圭也, 木村幸司, 甲本勝嗣, 城下治子, 高井宗宏, 辻 孝太, 辻本文登, 寺西辰郎, 橋爪俊明, 渡部典子, 渡邊雄之介

●ハンズオン

梅野智貴, 佐藤蓮花, 嶋野月江, 須藤和子, 徳丸沙耶夏, 仲谷優輝, 濱崎瑠菜, 福澄孝博, 山岸博子

●展示改訂(地学)

在田一則, 大槻淳子, 佐藤健一, 佐藤 豪, 田中優雅, 清水光希, 鈴木 花, 塚田則生, 寺西辰郎, 松田義章, 三嶋 渉, 横倉伶奈

●きたみてガーデン

片岡奈々, 近藤 縁, 佐藤百菜, 田中優雅, 駄場優子, 玉田聖司, 土屋憧真, 豊田真慧, 瀧岡 優, 星野愛花里

●水産科学館

木村克也, 馮 捷, 李 榘顯, 岸本早貴, 高橋雄大, 千田哲朗, 能登雄大, 東 大聖, 古庄 誠, 三田昂平, 三宅和志, 横山敢紀, 吉岡ほの香, 小幡光汰, 樋口淳也, 岡本大輝, 戸叶太郎, 深井佑多佳, 朴ソダム

【表紙写真】ナスカの地上絵